

第 9 章

児童・生徒観

樋田 大二郎

ここでは、管理職や教師が最近の児童・生徒の変化についてどのようにみているかを検討する。さらに、子どもたちの学力水準の状況や学力格差の程度が数年前と比べてどう変わっているかについての教師の実感を紹介する。

第1節

児童・生徒の変化

小学校では児童の問題傾向が増加し、望ましい性格・態度が崩れつつあると感じている教師が多い。中学校ではこれに加えて、家庭での学習習慣の喪失も指摘されている。

1) 小学校の特徴

児童・生徒の変化が学校教育を難しくしているとの指摘がある。本調査では一般教師と管理職に最近の児童・生徒の変化についてどのようにみているかをたずねている。

まず、小学校の管理職と一般教師に最近の児童の変化についてたずねたところ、表9-1の結果を得た。「増えた」と答える割合が大きかったのは、「自己中心的な児童」「受け身的な児童」「学校や教師に対して冷めたところのある児童」「授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする児童」などであり、多くの小学校教師が児童の問題傾向が増加していると指摘している。また小学校教師は、集団での学習指導を難しくする要因の1つと考えられる「児童間の学力格差」も「大きくなった」としている。

また、興味深いのは、「受け身的な児童」「児童間の学力格差」に関しては、管理職と一般教師との間に認識の差があり、管理職よりも一般教師のほうが「増えた」「大きくなった」と指摘する割合が大きい。

反対に「減った」と答えた割合が大きい項目をみると、「リーダーシップのとれる児童」「落ち着いたある児童」「粘り強い思考力のある児童」「協調性のある児童」などであり、多くの教師が児童の望ましい性格・態度が崩れていると指摘している。

2) 中学校の特徴

表9-2で、中学校でも、管理職と一般教師はともに数年前と比べて「自己中心的な生徒」や「受け身的な生徒」が増加し、「生徒間の学力格差」が「大きくなった」と指摘している。中学校ではさらに、「学校や教師に対して冷めたところのある生徒」も「増えた」と指摘している。

次に、「減った」と認識している割合が大きい項目をみると、これも小学校と同じく、「リーダーシップのとれる生徒」や「粘り強い思考力のある生徒」「協調性のある生徒」「落ち着いたある生徒」などの望ましい性格・態度に関するものである。それらに加えて中学校の管理職と一般教師の場合は、「家庭学習の習慣がついている生徒」が「減った」という回答が多く、また、一般教師に限っては「生徒集団の学力水準」の低下を指摘する割合も高い。

なお、小学校との比較では、中学校管理職・一般教師のほうが、全般に問題傾向の増加と望ましい性格・態度の崩れという否定的な指摘をする割合が大きい。生徒の変化に起因する今日の中学校教育の難しさを反映している。さらに、小学校の場合と同じく、中学校でも、管理職は一般教師よりも否定的な回答が少ないのが特徴である。

■表9-1 児童観(小学校教師・管理職)

(1)「増えた」という回答の多い項目 (%)

	小学校教師 (3619人)	小学校管理職 (642人)
自己中心的な児童	76.2	71.7
受け身的な児童	55.2	42.1
児童間の学力格差	50.8	40.7
学校や教師に対して冷めたところのある児童	41.9	41.9
授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする児童	37.6	38.6

注)「自己中心的な児童」「受け身的な児童」「学校や教師に対して冷めたところのある児童」は、「増えた」「変わらない」「減った」の選択肢のうち、「増えた」と回答した割合。「児童間の学力格差」は「大きくなった」「変わらない」「小さくなった」の選択肢のうち、「大きくなった」と回答した割合。

(2)「減った」という回答の多い項目 (%)

	小学校教師 (3619人)	小学校管理職 (642人)
リーダーシップのとれる児童	64.7	51.9
落ち着きのある児童	63.7	47.4
粘り強い思考力のある児童	58.5	51.4
協調性のある児童	58.1	44.7
家庭学習の習慣がついている児童	33.0	47.4

注) 数値は「増えた」「変わらない」「減った」の選択肢のうち、「減った」と回答した割合。

■表9-2 生徒観(中学校教師・管理職)

(1)「増えた」という回答の多い項目 (%)

	中学校教師 (3388人)	中学校管理職 (603人)
自己中心的な生徒	77.3	72.1
受け身的な生徒	59.1	45.3
生徒間の学力格差	58.8	47.3
学校や教師に対して冷めたところのある生徒	46.6	39.1

注)「自己中心的な生徒」「受け身的な生徒」「学校や教師に対して冷めたところのある生徒」は、「増えた」「変わらない」「減った」の選択肢のうち、「増えた」と回答した割合。「生徒間の学力格差」は「大きくなった」「変わらない」「小さくなった」の選択肢のうち、「大きくなった」と回答した割合。

(2)「減った」という回答の多い項目 (%)

	中学校教師 (3388人)	中学校管理職 (603人)
リーダーシップのとれる生徒	69.5	59.4
粘り強い思考力のある生徒	62.8	51.7
家庭学習の習慣がついている生徒	58.9	62.2
生徒集団の学力水準	54.7	30.2
協調性のある生徒	54.5	39.0
落ち着きのある生徒	51.4	36.5
なにごとにも意欲を示す生徒	44.9	35.7
自己表現力の高い生徒	42.3	17.7

注) 数値は「増えた」「変わらない」「減った」の選択肢のうち、「減った」と回答した割合。「生徒集団の学力水準」のみ、「高まった」「変わらない」「低くなった」の選択肢のうち、「低くなった」と回答した割合。

第2節

学力水準と格差の変化

学力水準が「低くなった」と回答する中学校教師は54.7%、学力格差が「大きくなった」が58.8%で、両者が同時に「悪化している」とする指摘はおよそ4割に達している。

最後に、学力水準と学力格差の動向について検討してみよう。これらは、日々の授業を困難にさせる問題であるだけでなく、わが国の将来の経済や社会、政治、文化などに与える影響が大きい。

表9-3は児童・生徒集団の学力水準と児童・生徒間の学力格差についての教師の認識の状況を詳しくみたものである。この表から、「児童・生徒集団の学力水準」が「高まった」と考えているのは、小学校教師ではわずか5.0%、中学校教師ではさらに減って2.8%しかない。これに対して、「低くなった」と答えた割合は小学校教師でおよそ3分の1の36.3%、中学校教師では5割を超えて54.7%にも達している。教師の目には児童・生徒の学力水準の低下が明確にとらえられている。

それでは、「児童・生徒間の学力格差」についてはどうであろうか。小学校ではおよそ5割の50.8%、中学校ではおよそ6割の58.8%が「学力格差」が「大きくなった」としている。反対に、「小さくなった」と答えた割合は小学校教師でわずかに2.8%、中学校教師でも1.3%であった。

表9-4は学力水準と学力格差との認識をもとに4つのカテゴリーを作り、教師全体を100%として、それぞれのカテゴリーが全体

に占める割合をみたものである。4つのカテゴリーとは、以下の認識である。

- ①水準が低下し、格差も拡大している
- ②水準は向上・不変だが、格差のみが拡大している
- ③水準のみは低下し、格差は縮小・不変
- ④水準は向上・不変で、格差も縮小・不変

小学校教師では、学力水準が向上し学力格差も縮小したとする教師はわずか0.5%、これに学力水準と学力格差がともに不変ないしは改善していることを意味するカテゴリー(④に該当するの部分)をすべて足しても合計で37.3%にしかならない。残りの62.7%が水準か格差かのどちらか、または両方で状況が悪化したと答えている。とりわけ水準と格差の両方が悪化したと答えた①のカテゴリーの割合は4人に1人の25.9%にも達している。

中学校教師ではこうした傾向がさらに悪化する。学力水準、学力格差ともに不変ないしは改善をしていることを意味する④のカテゴリーをすべて合計しても、わずか25.5%にしかならない。残りの4分の3がいずれか一方、または両方が悪化したと答えており、両方とも悪化したと答えた①の割合は40.3%に達している。

■表9-3 学力水準と学力格差(小・中学校教師)

(%)

		小学校教師 (3619人)	中学校教師 (3388人)
児童・生徒集団の学力水準	高まった	5.0	2.8
	変わらない	56.9	41.2
	低くなった	36.3	54.7
児童・生徒間の学力格差	大きくなった	50.8	58.8
	変わらない	44.6	38.6
	小さくなった	2.8	1.3

■表9-4 学力水準と学力格差(小・中学校教師)

(%)

		小学校教師(3549人)		中学校教師(3337人)	
		学力水準		学力水準	
		向上+不変	低下	向上+不変	低下
学力格差	拡大	25.8 ^②	25.9 ^①	19.1 ^②	40.3 ^①
	不変+縮小	37.3 ^④	11.0 ^③	25.5 ^④	15.0 ^③

注)「無答不明」を省いて再計算したため、表9-3と数値が異なる。